

自由討論

●一司会（加々美） 第4セッションの総合討論の司会は、黒川さんをお願いすることにします。自由討論は私が司会を務めます。それでは、私を含めて3人が第4セッションで話をしました。これをめぐってほかの先生方のコメントをいただきたいと思います。最初に、溝口先生お願いできますか。

●一溝口 先ほど、孫歌さんから、竹内好の歴史観のある部分について反発されるかもしれないという発言がありました。私は、昨日申し上げたように、竹内好が何を言おうと関知していません。問題は、それを言おうとしている彼の根底にあるもの、例えば、彼は五四運動から中国の近代が始まると言っています。これは非常に特殊な考え方です。私は16世紀、17世紀から近代へのうねりが始まるという見方をしています。そういう意味では反発するということになるかもしれません。彼が五四運動で言いたかったのは、そこから自覚する抵抗のアヘン戦争の時期を近代の始まりとするのは、いわば受け身の近代です。それに対して、欧米の列強の侵略に対して敗北を自覚して、そして立ち上がって自立の道を求めようとするところから近代が始まると、彼は言いたいわけです。

そういう意味での中国の近代の問題は、位相が2つあり、1つは思想の問題として、もう1つは歴史の問題として、竹内は思想の問題として出していると思います。

それから、地方自治の質問についてですが、これは地方自治の話としてよりも、孫歌さんがお話しになった歴史の非情さです。歴史の非情さという立場からも話をさせていただきたいと思います。

中国の近代過程の大きな特徴は、中央集権国家

が分権化に向かっていくということです。つまり省が独立するという事は、地方権力に中央権力が負けるということで、つまり地方権力化、分権化ということです。一般に欧米では、近代過程というのは、封建領主制の社会から中央集権的な国家に変わっていくことを言います。日本でもそうです。江戸時代の封建領主制から天皇制、中央主権国家に変わっていくと。そして、中央集権国家はまた別の言葉で国民国家と置き換えて、それが近代過程の始まりだと言われています。

それに対して、中国はまったく逆のコースを歩むわけです。皇帝制の中央集権国家であったのが分権化していくかたちで、皇帝制中央集権国家が崩壊するわけです。それが辛亥革命です。そのために、いろいろな意味にパラドックス（paradox）が生じます。例えば、先ほど申し上げたように、湖南省を太平天国の乱から守るために、湖南省の軍隊をつくるように王朝側から湖南省の責任者である曾国藩に依頼をします。曾国藩は自分の出身地である湖南省で軍隊をつくります。その軍隊で太平天国の乱を治めます。そして、その軍隊で清朝が倒されるわけです。自分たちを守るためにつくった軍隊で自分たちがやられてしまいます。つまり、軍隊は独立する場合の主要な権力になるわけです。

このように清朝を倒した軍隊は、やがて「封建軍閥」と言われるようになります。この「封建軍閥」は、欧米的な歴史観からの評価です。中国は、このあと、この「封建軍閥」に苦しむこととなります。そして、当時、これしかないと思われる国民国家、具体的には、社会主義人民共和国をつくります。

やっと統一したと思えば、その統一によって毛沢東の独裁を招き、文化大革命が起きることになってしまいます。その歴史のなかでたまたま犠牲になった、どなたかがおっしゃっていましたが、「竹内は魯迅に贖罪を見る」と。あるいは「罪の意識を持つ」と言われた竹内が偲んだ秋瑾をはじめとする革命家たちへのたたかいが、そこから生まれてきました。

中国が日本と違う歩みが太くあります。そして、もう1つは地方自治の問題です。中国の1つの県が、だいたい日本の江戸時代の藩の大きさと同じです。江戸時代の藩には、殿さまがいて世襲制で、武士団がいて、その下に庄屋がいて、代官がいて、農村は緻密に統制されています。福沢諭吉の言う地方自治は、そのなかの村単位の冠婚葬祭を中心とした付き合いです。

ところが、中国では、1つの県が1つの藩だとすれば、その県に中央から派遣される県知事がやって来て、これが政府のすべてなのです。自分たちの行政権力のために軍隊を使うこともできません。そのような、ガラ空きの状態にあります。

明代に1,700あった県の数、清代も1,700県で変わっていません。ところが、人口は明代が5、6千万人だったのが、清代になると2億から3億人になります。ところが県数は変わらず県知事の数も変わっていないのに地方自治が増えていくわけです。その勢力が、先ほど申し上げたように、社会力、経済力、政治力、文化力を掌握していくわけです。最後に、軍事力を掌握していくのです。そして、鉄道をめぐって中央政府との戦いで、中央政府から離脱していくのが辛亥革命です。

この大きな歴史の変革は非常に常識を破るものです。だから、これまで中国の近代過程と誰も認めていません。以上です。

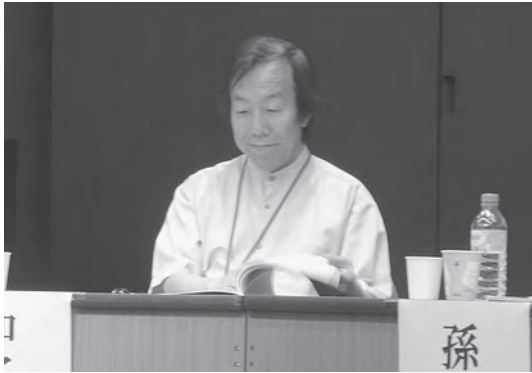
●一司会 いまままでの観点の補足でもあったと思いますし、孫歌さんが出された質問に対する回答にもなっているかと思います。どなたかほかにかがでしょうか。

●一黒川 竹内の見方の背景をうかがいたいと思います。先ほど、松本さんは自らを改憲論者だと言われましたが、それはどのような考え方からなのかということをお聞きしたいです。

●一松本 私が改憲論者だということは、否定しません。竹内好がむしろ新憲法に対して、アメリカの民主主義を導入したことについて、彼は全面肯定をしていません。民主主義については、これに反対をしないという言い方で微妙な立場を取っていたと考えています。

私の憲法に対する考え方は、隣に、「九条の会」の方がいらっしゃいますので、私が言うのはどうかと思いますが、日本国憲法第9条の第1項の「国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する」。昭和3年（1928年）に、日本が締結したパリ不戦条約の第1条が、「国際紛争を解決する手段としては、戦争はこれを放棄する」というものでした。日本が自ら締結した条約を、昭和6年の満州事変で破りました。このために、結果としては懲罰的に戦争放棄の条項を新憲法でうたい込まれるということになります。憲法第9条の第2項の「陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない」というのは、1941年、昭和16年8月14日のチャーチル（Sir Winston Leonard Spencer-Churchill）とルーズベルト（Franklin Delano Roosevelt）の大西洋憲章で、当時はまだ日本は開戦していませんが、ナチス・ドイツ、ヒトラー（Adolf Hitler）に対して「好戦国」という、戦争を好む国という認め方をして、たくさんの項目が挙げられるわけで





すが、戦争が終わったら元の国境線に戻すとか、主権は元の国に戻すとか、条項がたくさんあるわけですが、その第8項が、「好戦国は武装解除する」となっています。

結果として、その年の12月8日に日本が開戦しました。このために日本も「好戦国」と認められて武装解除されました。それを憲法第9条の第2項にうたいこまれたのが、「陸海空軍の戦力は、これを保持しない」ということです。

その意味では、日本人が理想としてつくり上げた憲法というような歴史的な見方は該当しません。歴史的な見方としては、昭和3年の不戦条約違反をしたことと、大西洋憲章で米英が互いに認め合った「好戦国」に対する懲罰が、第9条1、2項として認められたのです。

それを日本人は、戦後60年間守り続けてきました。しかし、イラク戦争は、アメリカがいわば「国際紛争を解決するための手段として」戦争を実施したわけです。その戦争に、日本が加わっていくということは、まさに憲法第9条違反だと、私は考えています。

そのような意味で言うと、憲法第9条を掲げた国が自衛隊という軍隊を持っていること自体にまやかし、ごまかしがあるわけです。ですから、憲法第9条というのは、実際に軍隊を持っていないという宣言なのです。武力を持っていないという宣言なのです。しかし、実際には持っているということは、国家原理のうちに既にまやかしを含んでいます。憲法というのは国家原理ですから、そ

の国家原理のうちにまやかしがあるのです。国家が犯してはならない、少なくとも自衛隊を持続けるのであれば、「戦争はこれを放棄する」と言っても、「自衛のための軍隊はこれを持つ」と言わなければいけません。あるものだからコントロールできるわけで、「ない」と言っているものはコントロールできない、というのが、私の考え方です。

ですから、そのようなことで考えると、近代の国家はナショナリズム国家ですから、ナショナリズムがファシズムに移行しないという歯止めをしなければいけません。実際の世界史のなかにある近代国家は、軍隊を持っていない国はありません。このことで、私は小田実さんとラジオで最近論争をしたことがあります。小田実さんは、「スイスのように軍隊がない国があるじゃないか」と言うのです。「そんなことはないでしょう。1軒に必ず1つは銃が置いてある。そして、それはいざとなったら自分たちで国を守るという気概ではないか」と、「50年前のスイスは平和国家であるというお題目を唱えていると、間違えます」ということで、2時間半くらいに渡る対談を今年しました。とにかく、私はそう考えています。

●一司会 はい。わかりました。では、続いて菅さん、お願いいたします。

●一菅 松本さんは改憲論、私は9条護憲、1章削除つまり天皇制廃止論ですから松本さんの今の話に触れると、竹内さんをそっちのけにして、議論がどんどんとよそへいってしまうので止めます。かわりに、北村透谷のことを発言された方がいらっしやいましたので、昨日、言いそびれたことを少し補足します。

私は、以前から魯迅の小説を読んでいくうちに、「これは日本だと北村透谷かな」と思いました。24歳で亡くなってしまいますが、北村透谷は、文学理論としては「想世界」に生きると自己規定しました。それは、政治も含めて現実の世界とは違うところを言論の場に選ぶということです。し

かしご存じのように、透谷は小学生のころから自由民権運動にかかわっていたという意味でも、死ぬ直前までキリスト教会で、日清戦争に対する反戦雑誌の編集をしていたという意味でも政治的現実生きていました。つまり、一方で彼は、最後まで自分がすてた筈の政治において日本を変えることにこだわっていた人です。そういう意味では、革命戦士に対して贖罪の意識を持った魯迅とも通じているかもしれないと思います。

ここから先ほどのお三方の議論とつながってくるわけです。孫歌さんがおっしゃったように、根底には贖罪の意識があり、その贖罪の意識を喚起しているものは、政治的な革命運動に対する加担の意識だという一面があるわけです。

そういう意味では、昨日、私が発表したときに「非政治」ということを魯迅に、政治を毛沢東に、という二分法は少し修正しておかないといけないと思います。

それから、孫歌さんに限らず、昨日の中国の研究者のお二方の発表も含めて、日本人にない視点で、竹内好を媒介にして、中国自体の問題を照らすという研究が進んできているということに感動を覚えています。このことを、日本人として申し上げておかなければいけないなと思いました。

次に、アジアにプラス・イメージが持たれたから、それを介して竹内好再審が起こったのか、あるいは抵抗のアジアの可能性がなくなってしまったために、そのようなものが出てきたのかという部分の議論については、私は二重の考えを持っています。

表面的には、アジアに対する他の地域、とりわけ欧米の関心は強くなっているという一面はあると思います。ただ、今日に至るまで、その関心の持ち方はオリエンタリズムの延長だという感じがします。私が演劇関係の人間でもあるので思うのですが、欧米の、それなりに感度のよい人々には無自覚なオリエンタリズムというべきものが根づよいです。西欧の演劇学者のなかにはメイエルホ

リドがいかに能から学んだかとか、そういう視座から日本を「アジア」の一翼としてとらえ高く評価する人がいます。あるいはアリアヌ・ムヌーシュキン (Ariane Mnouchkine) というフランスの演出家は、ヨーロッパの演劇は言葉だ、アジアには様式と身体があると言っています。そして文楽とか、能とか歌舞伎をものすごく高く評価する。

日本に限らずアジア・アフリカという枠に広げると、ピーター・ブルック (Peter Brook) という演出家もアジア・アフリカが「大好き」です。ただ、アジア・アフリカが大好きな人たちがイメージしているアジアは、抵抗のアジアでもなく、いささかあやしいオリエンタリズム (orientalism) のアジア・アフリカを含みこんでいます。その意味では、日本も含めてアジアというか欧米にとっての非欧米が高く評価されるという状態は続いています。

これには同調できないのを感じます。私は、基本的には、加々美さんがおっしゃったように、抵抗のアジアも何もないところまで落ちてしまったなかから、それを反転させなくては、という観点に立っています。ただ、その場合、日本とはいったいアジアなのか、というところが気になります。

それから、「根」のことですが、加々美さんのご発言に異論があるわけではありません。しかし、ある意味ではパラドキシカルに言うと、無根のナショナリズム (nationalism) という、おっしゃった意味とはまったく違った意味で、国家という根



のがないところに立たざるを得ない人々の抵抗の拠点を探すとにかくに竹内好を読みかえることができないだろうかというのが、私の問題意識です。イスラエルをみれば、国家という「根」をもったディアスポラ (Diaspora) の民のゆく末がはっきりしているわけですから。ディアスポラの絆、抵抗の拠点は何か。国を持たないエスニシティ (ethnicity) の根は何だろうか、形あるものとしての根では明らかにないのですが、それがどのようになっていくかというのが、こんにちの思想的課題で、逆説的ですが、ある意味では陰画として竹内好を参照することによって、知恵が浮かぶのではないかと、また、その知恵に照らされて、われわれの国家という根を持つことによって抵抗の根を失ってしまったわれわれのあるべき絆についての模索も可能なのではないだろうかと考えています。

●—司会 私が使っている「根」は、無論「抵抗の根」です。抵抗を支えるものとしての「根」です。「根」としての国家、郷土という概念はもう少し複雑ですが、いずれにしても、郷土よりももう少し生活や生産に密着しているという意味の言葉として「根」を使っています。

●—松本 私は、竹内好がドイツで読みかえされるときに、ヨーロッパ主義というコンテキスト (context) があるのではないかと言いました。EU (欧州連合) の場合には、一方ではヨーロッパ主義をとり、一方ではパトリオティズム (patriotism) という「根」に、非常に大きく情熱が傾けられています。むしろ、近代国家というものは解体しつつあり、EU のなかに入ってしまうと、スペイン、ドイツはなくなってもいいとまで考えている人々がいます。スペインという国がなくなり、例えば、カタルーニアとか、バスクとか、そういう人々は近代国家という枠を外してしまってもいいと。むしろ「根」とすれば、バスクというのは国家自体をもっていないわけですが、バスク語というものに対して非常に大きな関心で学びなおそうと。ア

イルランドであればゲール語です。イギリスのなかでも、英語は世界共通語ですから、英語を母語と考えず、むしろウェールズ語とか、スコットランド語 (ゲール語)、それから、アイルランド語 (アイリッシュ)、そういうかたちで「根」を求めていきたいという動きになっています。

それは、むしろ、パトリ (patrie) と言ったほうがいいと考えます。アメリカの場合は、パトリオティズムというと「愛国者」という訳しかないわけですが、日本、ヨーロッパ、中国もパトリオティズムの訳に、「祖国愛」という訳と同時に「郷土愛」という言葉が入ってきます。

その「郷土愛」を具体的に保証するのが伝統的な言葉です。「パトリ (祖国) は言語にある」という言葉があるように、そういう意味では、パトリは伝統保持ということになります。この問題と竹内好が言った「根」の場所としての「根拠地」と言ったものとは、問題意識が重ならないとも考えられます。

それは、ある意味で竹内好のナショナリズムというよりもナショナルな思想から超えて行かざるを得ない問題意識になるのではないだろうかと思います。そのように考えると、例えば、竹内好の大ファンで信奉者であった谷川雁さんは、「東京へ行くな」という詩をつくりました。「東京へ行くな、ふるさつをつくろう」という、そのふるさとは、毛沢東の言った「根拠地」という言葉を、つまり竹内好が毛沢東思想から抽出した「根拠地」を「ふるさつ」という言葉で言い換えたわけです。しかし、谷川雁さんはその運動に失敗して、自ら東京に出てきてしまう逆説を体験するわけです。

ヨーロッパ主義というだけで、竹内好の問題を考えようというのとは、もう1つ別のランクの問題がある。ナショナリズムをどのように超えられるかということが、ヨーロッパのなかでは、ヨーロッパ主義というかたちで1つのネーション・ステイト (nation state) の枠、あるいはナショナリズムの枠を超えていこうとします。また一方では、



パトリオティズムという伝統的な共同体の領域に戻っていく、という考え方が出てきているのではないかと思います。

●一司会 非常に面白い指摘がありました。では、鶴見さん、何かございませんでしょうか。皆さんのお話をお聞きになっていて感想などいかがでしょうか。

●一鶴見 孫歌さんが書かれた本のなかで、菅孝行さんのテキストをひいて、『竹内好という問い』の223ページに、評論集三巻本の序文ですが、「和氏の璧」ということが書いてあります。「和氏でない私は、20年かかって掘りおこしたものが、玉の原石であるか、それともただのガラクタ石であるか、自分では判定がつかない。王は献じなかったおかげで足は斬られずにすんだが、その代り、玉人に相させることも怠った（評論や新聞などに）。ひたすら発掘だけに熱中した。さて、気がついてみると、日はとうに西に傾いている。これから家に持ち帰って、自分で磨くだけの気力が残っているかどうかもあやしい」。

結局、それが竹内好の気分なのです。それよりももっとあとに、『中国』という雑誌を竹内好は出していました。それは目的を1つに絞って、政治について限定するわけですが、日本国は中国と国交を回復すべきだと、それ1つだけでずっとやっていました。それが田中角栄の才覚によって実現しました。それでやめることにしました。やめる直前に、まったく自由な立場で1冊つくりました。それは、とても変な座談会ですが、全部匿

名にして仮面をかぶってやろうというのです。集められた人は、竹内好、山下恒夫、橋川文三、みんな死んでしまいましたが、生き残っているのは私だけです。長生きしたものです。場所は、ホテルコンゴウでした。これは連れ込み宿なのです。驚きましたね。美空ひばりが使っていたというホテルだけでも、とにかく驚くべき場所で架空の人間になって座談会をやりました。もしかしたら読んだことのある方がいらっしゃるかもしれませんがね。とにかく、孫歌さんは読んだら私たちに感想をきかせてほしい。

橋川だけは一高を卒業しています。「嗚呼玉杯に花うけて」。この終わりのところが、「魑魅魍魎も影ひそめ 金波銀波の海静か」。金波銀波はわかるけれど、魑魅魍魎とは何だという問題が出ました。わからないですね。そこで竹内好は辞書を引いて、きちんと答えを出しました。魑魅は影であって、魍魎は影の影なのです。だから、言葉があると言葉の意味を科学的に確定すると意味がありますが、意味に縛られない、意味の影ができて、その影の影ができて、これが浮遊するのです。そして、言葉を使っているというのは、そういうことで、ことに日本のように2000年ほど使っています。この日本語はイギリス語よりもフランス語よりも古いのです。近代主義者はそれを忘れていきます。スペイン語などはさらに新しいものです。

この古い言語の意味に、さらにくっついている魑魅も魍魎も全部網羅して引き受けて、何とか交換する場をつくりたい、それが竹内好の言語の理想です。

影の影までひっくりかえって言葉を掘り起こしたい、それは竹内好が文学者になるという決意のなかにあるのです。そのような言語空間をつくりたいと。だから、中国語に目覚めたことも、そのなかにあります。中国のほうには、さらに魑魅魍魎がたくさんあります。そのなかでやっていきたいということです。そうなってくると、戦争とか国

家とか平和というのは非常に複雑になります。

だから、大東亜戦争は1931年に起こったものではなくて、長い間の近代に入ってから中国蔑視から自由になりたい、その前に中国崇拜などいろいろなものがあつたのですが、全部引き受けた言語空間のなかで自分は文学者として孤立して、誰にももたれ掛からずに生きてみたいと、そのなかに竹内好の活動があるわけです。そのように見ていきたいです。ですから、意味を科学的な意味に限定して、1つの命題があると、その意味は何かということを引きちんとすることから離れたいのです。

ですから、論理実証主義、私の習ったカルナップ (Rudolf Carnap) の考え方からはずいぶん自由な状態ができるわけです。そこに考えをおいて、戦争と平和を考えてみたいと。だから、まったく茫漠とした魑魅魍魎の場、しかし、取りあえず、戦後、交際を打ち切ってきた日中国交だけに限定して自分は活動したいということになります。

人類世界から戦争を追放します。これは動物の歴史としては大変なことです。人間だけが殲滅戦をするのです。オオカミやイヌはやっていないですよ。イヌ畜生なんていうのは、道徳で考えるとまったくイヌに対して失礼な話です。そういうことから掘り起こさなければなりません。

われわれは、戦争から逃れたいという理想を持っています。世界に先駆けて原爆を2発も落とされていますから。あれほどの都合で落とされたのでしょうか。U.S.A がドイツに先に落とされそうになると困るから、つくったのです。日本は原爆をつくらせていないのです。日本がつかうことができないということが大統領はわかっていたけれど、持っている2つの原爆を落としました。これを提案したアインシュタインは、そのことを予期していませんでした。ドイツに抜かれると思ったのです。しかし、これに参加した科学者や技術者は、日本が原爆をつくらないことを知っていました。まったく、そのうえで落とされたのです

から、科学者という概念をひっくり返したのです。

科学者は、もはや人類のなかのもっとも凶悪な部分だ、ということに気が付かないのです。そして、文部大臣が能天気なことを言っています。研究費を増やしてノーベル賞受賞者をあと30人増やすと。このような能天気な国策を掲げているのが日本国というものなのです。スロットマシンと間違えています。100円を入れるとチューインガムが1個出てくるように、科学者の頭がそうなるかと思っているのです。いえ、そうなっているのかもしれませんが。われわれは、そういう状況にあるわけですから、今や科学者に抗して戦争をなくすことは当然の理想です。偶然、それに近いものをわれわれが持っているので、できるか、できないかはわかりませんが、やってみようではないか、というのが私個人が賭けている九条の会です。できるかどうか知りません。私は日本の知識人を非常に低く評価しています。こと明治以降は駄目です。明治以前はましです。別に、日本人が脳みそが悪いと言っているわけではありません。明治以前が偉大なのです。万次郎は、14歳で学校へも行っていません。しかし、非常に知力を持っているし、捕鯨船の船長と無言で会話を交わしました。これは高度な安保条約です。

小泉首相とブッシュ大統領が交わしている、ブッシュ大統領が口を閉じないうちに、「イエス、イエス」なんて言っているのはまったく違います。非常に高度の文化的なものだし、偉大な政治です。それだけ日本が落ちているということに気が付かないのですから、これは大変なものです。私は、日本国が減びることを望みます。そして、この島に住んでいる日本人はもう少しましな未来を人類のためにつくることできるかもしれません。わかりません。だから、そちらに賭けます。

竹内好は、もともとそういう童話の好きな人でした。雑誌『中国』の最後の項を匿名でやった座談会で話題は「魑魅魍魎」、そういう企画のなかに、既に理想が含まれていたのです。

●—司会 ありがとうございます。それでは、フロアから質問をいただくかたちに戻したいと思います。はい、どうぞ。

●—質問者 竹内好について知るところの少ない私が、今回参加させていただいて、諸先生方の細密なるご研究、あるいは観察を感慨深く拝聴させていただきました。これを契機になお深く自分なりに読み、かつ考えるよい機会になったと感謝しています。

私は、小学生、中学生を対象にスポーツのコーチをしています。スポーツの実技の間に、木陰で憩いながら自分の体験を語ることをここ数年しています。今回のような竹内好の考え方を自分なりにつかませていただいたことを非常にありがたく、またこれを応用していけるのではないかと考えています。

ここで、やはり相手が小中学生になると、諸先生方のように深く踏み込んだ話ができるわけではありません。私なりの考えで簡単に言うとなると、例えば、東に米国、西に中国、その間の塀の上を日本人が歩いていると、日本人は平均を取りながら歩いているつもりでいるけれど、その塀はトタン板みたいな薄っぺらなもので、極めて危なっかしい。しかし、例えば、西側から見ると日本人は塀の上に立っているのではなく、塀の向こう側にいるのではないかと。その逆を言われるかもしれません。そのあたりで、実はトタン板の上を綱渡りするような危ない感覚でいると思っている日本人がどのくらいいるのか、自分ではわかりませんが、話をする機会もなく、ジャーナリズムで取り上げられる機会も少なく、非常に不安定な状況だと自分なりに解釈しています。

ここで、竹内好の話、信念、歴史、哲学について聞くことは、非常に大きな力になると感じました。願わくば、そのトタン板のような細い道ではなくて、もう少し万里の長城とまでは言いませんが、1メートル幅で闊歩できるくらいの信念とか裏付けといったような共通の理念というかたち

で、日本人ができなくてはいけないのではないかと思います。

そうは言いながらも、アメリカのおかげで成り立っているのだと言わんばかりの言い方をする人もいますし、逆に日本バッシングの最中に、橋本龍太郎が米国債を売りたい誘惑にかられると言ったら、翌日ウォール街で米国債が大暴落したことがありました。それ以降、そういうことは禁句になりました。あるいは行政関係については、アメリカ側からの指示に近いようなかたちの文書が来ているということをジャーナリズムがちらほらとは言いますが、明確に言う機会も場所もない、ジャーナリズムが責任を放棄しているという見方もあります。

一方では、ナショナリズムの話が出ましたが、浅薄なるナショナリズムに、一辺倒になりがちな日本人の性格からすると、尖閣列島や竹島は、非常に火が付きやすい状況です。ただし、火が付いたら、具体的にどのようなことが起きるのかわかりませんが、そのような危険性をはらんでいると思います。そういうことも含めて、例えば、竹内好の考え方を普遍する、あるいは魯迅の考え方、見方、その2人だけでいいのだろうか、という疑問もあります。

せっかく、このような場に学生諸君の姿がないというのも非常に不信に思います。そういうことで、感謝しながらもなお疑念がありますので、その辺りのことについて加々美先生にお願いしたい



と思います。以上です。

●—**司会** はい、わかりました。では、あともう一人、どなたかお願いします。

●—**質問者** 竹内好についてのシンポジウムがあるということで、まず感謝申し上げたいのは、岡山さんと孫歌さんという女性の方がいらっしゃることです。

なぜかという、タイトルが「日本・中国・世界」となっていますが、いままで政治集会とか、政治のシンポジウム、経済のシンポジウムでのパネリストは、ほとんどが男性です。世界に女性はいないのか、という疑問を持ってしまうのですが、先ほど、フロアから一人だけ女性の発言がありました。通常、集会やシンポジウムでのフロアからの質問も男性ばかりです。そういう意味で、このシンポジウムのパネリストのお二方に感謝申し上げます。

質問ではありませんが、先生方の話のなかで文化大革命のことが出ました。私の年代は、松本健一さんと同じくらいの世代です。一般的には団塊の世代と言われている全共闘世代です。私たちの世代には高橋和巳と竹内好の著書がよく読まれていました。

吉本隆明については読んでおらず、竹内好により惹かれました。それは『思想の科学』という雑誌に高橋和巳が竹内好について書いていました。それを読んで竹内好に関心を持ちました。竹内好は、私の父と同じ年で、明治生まれで断絶の世代と言われ、断絶という問題を抱えていたので、竹内好について親しみが持てました。

いろいろと竹内好の著書を読んで、一番、印象に残っているのは、世界の大勢から問題を起こさないという点です。つまり、今日も竹内好が流行

しているから、このようなシンポジウムが開かれたのではなくて、むしろ逆の意味でシンポジウムが開かれています。例えば、日本で竹内好がブームになって流行になって、誰もが竹内好ということで講習会が開かれていたら、私は参加していません。そうではなくて、逆の現象が日本にはあるため、竹内好の問いについて、その当時から問い続けてきました。それは、誰かがおっしゃった言葉ですが、敗北の持続みたいなものを、私個人としてはずっと持っています。それが、私にとっては70年安保闘争ですが、鶴見さんたちの世代にとっては、60年安保闘争になると思います。

先ほどの文化大革命をどのように見るか、ということに関連して、位相が違う問題ですが、やはり全共闘世代の大学闘争をどのようにとらえるか、どのように評価するかということが、私にとっては知識人に対する1つの評価の見方です。

なぜ、竹内好にこだわるのかというと、E・H・ノーマンの『忘れられた思想家』の題名ではありませんが、私にとっては竹内好は忘れることができない思想家です。忘れたくない思想家です。だから、ずっとこだわり続けています。それが、若い世代の日本と中国の方で、孫歌さんや岡山さんのように竹内好についてりっぱな著作を出されたということは大変うれしく思います。特に、来年、竹内好が没して30年になりますが、男性ではなくて女性からこういう発表があったことがすごくうれしいのです。本当に感謝申し上げます。長々とすみませんでした。

●—**司会** はい、ありがとうございました。それでは、ちょうど時間となりましたので、テーブルイクに入りたいと思います。